

<<東北魂>>を鼓舞する
電子新聞

発行所 株式会社遊無有
〒207-0015
東京都東大和市中央 1-539-15
http://www.yumuyu.com/
e-mail:y.s.yumuyu@ozzio.jp

東北再興

Re-Create, TOHOKU!

無料

第145号

毎月発行

発行 2024年(令和6年)6月16日 日曜日

2024年(令和6年)6月16日 日曜日

【当新聞発行責任者 兼編集長兼記者紹介】

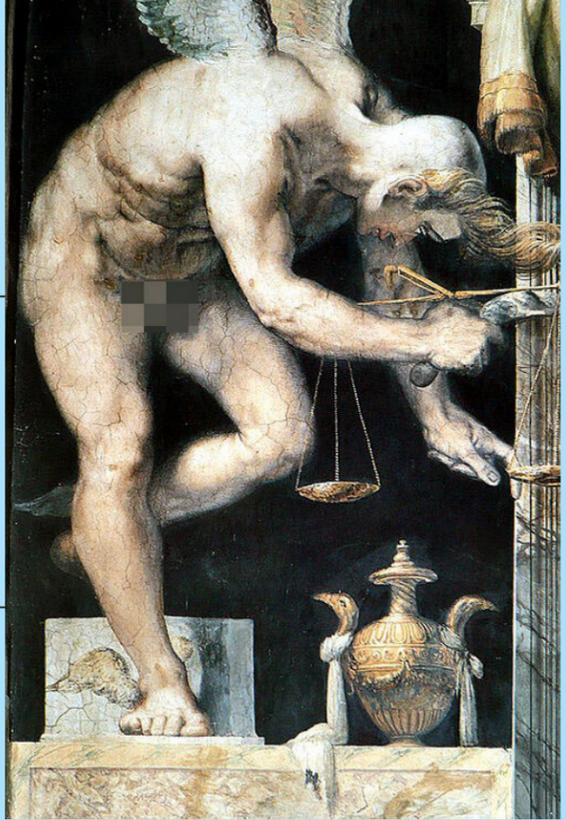
【砂越 豊】

宮城県生まれ、70歳の新人歴史映像作家兼プロデューサー。3作目の「古代製鉄の埋もれた歴史を発掘した映像」の【奪われた古代鉄王国】の崎上映会は延期。乗けて縄文を日大の新しい制作に代れた東北文化研究。埋もれた東北の本を掘り出すことを標榜。



【新シリーズ②】『東北って何だろう?』 「辺境東北」だからこそその大チャンス到来の予感 幸運の女神には「後ろ髪」はない! 雌伏千年、千年来の大チャンスは絶対逃すな!

「チャンスを訪れたそのときに掴まなければならぬ」という意味で用いられる。筆者が少し変形させて、「後ろ髪」はない、とした。古代ギリシアの詩のなかで「時」または「好機」の神カイロスの容姿について、この神は出会った人が捕ま



幸運の女神には【後ろ髪】はない
(1話5分で読めるギリシャ神話より)

えやすいように髪が前に垂らされているが、後頭部には髪が無い。追いかけて行って捕まえることはできないとある。記事冒頭にこのことわざを記載したのは訳がある。

「辺境東北」にいま大チャンス到来の予感
まことに唐突ではあるが、いままで「辺境」と位置づけられてきた東北に、とてつもない大チャンスが到来しようとしていると予感させる現象があちこちで起きて

ていると思うのである。これは筆者の東北への重たい入力が強すぎるために生じた妄想である可能性はゼロではないが、何かいままでとは違う動きがどんどん大きくなっていくような気がしてならないのだ。

海外の大都市圏と比較
国内だけみているとよく分からないかもしれないが、世界の大都市圏と比較してみればより分かりやすいかもしれない。

りと準備をしておかないと、幸運の女神の【前髪】をつかまえるチャンスを逃し、あとで追いかけて行っても、「後ろ髪」はないから捕まえられず後悔するということがないように祈りたい。具体的な兆しを数え上げよう。

より高給が保証される仕事があるから、暮らしていくのを我慢してバランスをとっているが、その仕事はばつとしない。大都市圏とは、全体として「前進」しないと、ストレスばかりが増えるエリアである。もともとストレスが多い場所にさらにストレスが加われば、住環境はさらに悪化していく。

倒産が増えている。人口密度が高すぎる大都市圏はもとと住むのには適していない。

上海で働く日本人からも中国人からも、上海の魅力が薄れたとの声が多くなっている。



大谷選手 第17号ホームラン (Yahoo ニュースより)



『尊富士』優勝の瞬間・・・毎日新聞より

大都市圏は劇的に変わる
のである。日本の大都市圏
も変わりうるのである。

東北は大都市圏の活力 降下の受皿になれる？

大都市圏の勢いがなくなると、どこか他所のエリアに勢いを求めて移動していくのが常だ。

それはこの国のどここの地域になるだろうか？

現時点までに、すでに大都市圏の役割を多少なりとも肩代わりしている地域は、大都市圏の勢いを短期間でいきなり受け入れるためのキャパシティはあまり無いかもれない。

しかし、この東北は、まだ余力があるように思うのだ。

つまり、これまで、さまざまな分野での活動が他所に奪われ、少なかったと思われる。そのことは逆に、まだまだ受け入れ余地が残っているということになる。もちろん、大都市圏と東北とが、一挙に大逆転するわけではなく、ほんの少しづつ、そして、まずは「広い裾野」の拡大から始まるのだが、すでにいくつかの兆候も出ていると感じる。

東北の明るい材料① 東北の野球興隆

この分野のけん引役はご存じのドジャースの大谷選手である。

国内だけでなく、アメリカでも、大谷選手人気はものすごいものがある。

そこから、東北の野球チームのすそ野拡大に一役買っているのを感じる。

大谷選手と同じ右投手出身の菊池雄星投手も大リーグで活躍中、一人ではない。

高校野球も、仙台育英高校が、一昨年夏に悲願の優勝、昨年は準優勝で、東北の高校野球のレベルも人も人も急上昇したことであろう。

スポーツ界での大谷選手活躍がもたらす効果は、日本よりもアメリカの方がいまのところ大きい。

ドジャース入団契約額がスポーツ界最高額の一千億円超で話題となったが、ドジャースの広告契約が、大谷選手移籍後のたった一年でその一千億円を取り返しそうだとの観測もある。

わずか一年で一千億円の規模の広告増である。こうしたことの波及効果は想像以上に大きいと思う。

経済効果だけではない。東北の自信、誇りという精神面に与える影響も計り知れない。

まだ大谷選手は東北に里帰りはしていないが、もし近々、岩手に里帰りとなったら、どんなことが起きるのか想像もつかない。

経済効果だけでなく、東北人の自信や誇りは一気に燃え上がるかもしれない。

東北の明るい材料② 東北の相撲興隆

この野球に加えて、今年の春場所で、史上初の新人幕力士の優勝の尊富士の人も

気も続いて欲しいものだ。百七年ぶりの記録と騒がれたが、当紙が取り上げたように、この記録は百七年ぶりの記録ではなく、「史上初の記録」なのだ。

その点を再度、東北のメディアが揃って掘り起こして話題に取り上げて欲しい。

先場所は残念ながらケガで休場となったが、再度雄姿を見せて欲しいし、多数の力士を輩出した相撲大國青森の相撲人気にも再び火をつけて欲しいし、他の東北五県にも波及させて欲しいと願う。

また、これをきっかけに、野球や相撲というジャンルに加えて、別のスポーツの興隆も欲しいところだ。

スポーツが果たす効果を、見くびってはならない。

昨年から今年にかけて、日本半導体復活ののろしが上がった。

東北の明るい材料③ 東北の半導体産業振興

口火を切ったのは熊本県のTSMC工場進出。

ついで、札幌のラピダス。この二つのプロジェクトに、民間と国を合わせて投資した額はものすごい。

そして遅ればせながら、宮城にも先端半導体工場が進出することになった。

半導体産業の裾野は広い。その経済効果も見た目以上に大きい。

東北では世界の半導体の父ともいわれた故西澤潤一氏が活躍していた。その抛

点は東北大学だった。今後、半導体産業の主体は、工場進出の初期段階から、関係人材育成産業などの関連分野に移る。

東北には半導体の長い伝統がある。必ず、半導体産業の第二ステップでの活躍が出来るし、やらなければならぬ。

既存観光地は「オーバーツーリズムで敬遠気味」

最近の急激な円安と海外の超物価高が、日本への観光熱に火をつけた。

日本中、あちこちに急激に外国人があふれている。筆者も2か月前、所用があつて銀座あたりをうろつ

いたが、道行く人のほとんどが外国人で、少し歩き疲れてコーヒーでも飲もうとして喫茶店に入ろうとしたら、一時間以上待ちと言われてびっくりした。

東北の明るい材料④ 既存観光地は「オーバーツーリズムで敬遠気味」

既存観光地での「オーバーツーリズム」が話題だ。京都では、あまりの「オーバーツーリズム」で、京都に暮らしていくにつれて、人口が周辺都市に流出しているほどだという。

富士山登山も、この記事の写真にあるように「すごい」の一言である。

最近話題になった「盛岡観光ブーム」だが、海外メディア特派員の記事がきっかけで、盛岡に海外から観光客が押し寄せて地元が大

混乱している。

観光客のSNSによる「拡散」で、それまで有名でもなかった地域が一挙に大観光地になるが、こうしたケースが、東北で増えてくる予感がある。



オーバーツーリズム「京都」(京都新聞より)

準備をしっかりとっておかないと大変なことになるが、観光客はそれなりのお金は落としていくだろう。

経済効果は測定不能であるが、大いに期待できる分野である。

この分野はこれからであるが、日本への観光ブームが東北の祭りに「飛び火」したら、いったいどうなる

のだろうか？空恐ろしい。

夏開催の東北各地の祭りに海外からの観光客が殺到したらどうなるのか？

うまく受け入れることができれば、ものすごい効果が得られるにちがいない。

東北の明るい材料⑤ 東北の祭りやアート

先日、「学校のリーダーズ」というグループの海外公演の一部をTVで見たが、すごい熱狂と興奮が伝わってきた。

日本を軽々と飛び越え、海外公演を主体としていくつもりなのだろうか？

東北からこうした、いきなり海外進出のアーティストが出現することをぜひ期待したい。

これまでに挙げてきた要素がひとつのかたまりになって、さらに大きくなっていくには、「核」が必要だ。

オール東北が、東北人が一致団結できる「核」である。それは何か？

最初に言えることは、日本の高度成長期の大都市型思考パターンを引きずるやり方は古すぎるので、追いついていかないこと。

当然ながら、国内の主流をマネして二番手以降に甘んじないこと。

産業も同じ、大都市圏の産業の後を追いかけても世界から取り残されるだけ。

「辺境東北」だからこそ、

古くさい日本パターンをマネせずに、オリジナル路線が開発できるメリットを最大限に生かすこと。

筆者の思い付きだが、その「核」とは「中央集権への反骨の歴史」ではないか？

そして、関連する歴史の掘起しではないか？東北の反骨の歴史を掘り起したらどうなるだろうか？

ここ千年ほどは負け続けの東北だが、「見事に」反骨を貫いてきたことを誇りに思うことを「核」にしようではないか！それが「東北アイデンティティ」ではないか！「雌伏千年、千年来の大チャンスは絶対逃すな！」と言いたいのだ。



オーバーツーリズム富士山 (中日新聞WEBより)

「核」

これまでに挙げてきた要素がひとつのかたまりになって、さらに大きくなっていくには、「核」が必要だ。

オール東北が、東北人が一致団結できる「核」である。それは何か？

最初に言えることは、日本の高度成長期の大都市型思考パターンを引きずるやり方は古すぎるので、追いついていかないこと。

当然ながら、国内の主流をマネして二番手以降に甘んじないこと。

産業も同じ、大都市圏の産業の後を追いかけても世界から取り残されるだけ。

「辺境東北」だからこそ、

古くさい日本パターンをマネせずに、オリジナル路線が開発できるメリットを最大限に生かすこと。

筆者の思い付きだが、その「核」とは「中央集権への反骨の歴史」ではないか？

そして、関連する歴史の掘起しではないか？東北の反骨の歴史を掘り起したらどうなるだろうか？

ここ千年ほどは負け続けの東北だが、「見事に」反骨を貫いてきたことを誇りに思うことを「核」にしようではないか！それが「東北アイデンティティ」ではないか！「雌伏千年、千年来の大チャンスは絶対逃すな！」と言いたいのだ。

古くさい日本パターンをマネせずに、オリジナル路線が開発できるメリットを最大限に生かすこと。



新しい学校のリーダーズ、LAの音楽フェスで海外初パフォーマンス (ASOBISYSTEMより)

「東北絆まつり」が紡ぐ絆

七年ぶりに仙台で開催

「東北絆まつり」が六月八日、九日の両日、仙台市内を会場に開催された。「東北絆まつり」としては七回目、仙台での開催は第一回以来七年ぶりとなった。東北六県の県庁所在地の夏祭り、すなわち青森市の「青森ねぶた祭」、盛岡市の「盛岡さんさ踊り」、仙台市の「仙台七夕まつり」、秋田市の「秋田竿燈まつり」、山形市の「山形花笠まつり」、福島市の「福島わらじまつり」が一堂に会するイベントである。二日間の人出はおよそ五七万二千人と、「東北六魂祭」、「東北絆まつり」両方を通じて過去最多となった。

「東北六魂祭」の誕生

「東北絆まつり」は、その前身の「東北六魂祭」の跡を継いだイベントである。二〇一一年三月一日の東北地方太平洋沖地震によって引き起こされた東日本大震災で東北地方の太平洋側

執筆者紹介

大友浩平

(おおもともこうへい)

奥州仙臺の住人。普段は出版社に勤務。東北の人と自然と文化が大好き。趣味は自転車と歌と旅。

「東北ブログ」

<http://blog.livedoor.jp/anagma5/>



Facebook
<https://www.facebook.com/kouchi.ohtomo>

日に「盛岡さんさ踊り」を例年通りの日程で開催することを表明すると、翌六日には青森市長が「青森ねぶた祭」と「仙台七夕まつり」の共同開催を呼び掛けた。同一六日には秋田竿燈まつりも例年通りの開催を決定し、そうした動きに後押しされるように四月二十六日には「仙台七夕まつり」も例年通り開催することになった。翌五月には「山形花笠まつり」と「福島わらじまつり」の開催も決まり、ついに東北六県の県庁所在地の夏祭りが揃って例年通り開催されることになったのである。

これは英断だったと思う。祭りが揃ったはずである。見方も当然あつたはずである。しかし、祭りはその地の人の心を湧き立てる。元気にする。そうした機会こそが、当時の私たちに必要だったのだと、今なら分かる。まして、「仙台七夕まつり」は、実は鎮魂と復興を願うにふさわしい祭りである。願い事を書く短冊、災いの厄除けとなる紙衣、延命長寿を願う折鶴、たくさんの幸運を引き寄せる投網、故人の霊を慰めるくす玉、その指す意味が、鎮魂の復興への願いに通じている。震災後の早い段階で、東北各県が、東北が最も盛り上がる祭りを例年通り開催することを表明したことは、被災したたくさんの人々を大なり小なり力づける効果があつたと思う。そして、青森市長の「青森

ねぶた祭」と「仙台七夕まつり」を同時開催しようとの提案をきっかけに動き出したのが、これら東北六県の県庁所在地の夏祭りが一堂に会するイベントを企画して、震災からの復興を力強く後押ししようという動きだった。普通に考えて、それだけの大掛かりなイベントを数ヶ月で開催することなど無理難題である。しかし、これが実現したのである。「東北六魂祭」の第一回は、東日本大震災の発災からわずか四ヶ月後の七月一六日、一七日に開催された。青森市長が共同開催を提案してからだと三ヶ月ちよつとである。よく実現したものだと思う。

それはもちろん、震災からの復興を目指して何とか地域を元気づけたいという関係者の並々ならぬ思いと努力があつたに違いないが、それに加えて震災前に東北六県の商工会議所と祭りの主催団体とで結成された「東北夏祭りネットワーク」の存在も大きかった。同ネットワークは二〇〇九年に件の六つの夏祭りの主催団体と六市の商工会議所とで設立され、その翌年の二〇一〇年には県庁所在地以外の夏祭りも加わって、三五の商工会議所と三八の夏祭りが連携する体制を築き上げていた。この年の一月には東北新幹線の青森延伸が予定されており、東北六県の県庁所在地が全て新幹線で結ばれることと

なつていた。そこで、東北六県の夏祭り同士が連携してPR活動や情報発信を行うことを目的にネットワークが結成されたのである。そこから電通東日本東北支社に相談が行った。相談したのが同ネットワークだったのか、ネットワークに所属するどこかの夏祭り主催団体だったのかは様々な資料を見たが必ずしも明確ではない。ただ、電通東日本東北支社と電通は震災を受けて「復興支援サポート室」を立ち上げていて、そこを通して電通に協力依頼を行い、電通内にチームが結成され、ここが具体的な企画や構想、制作進行を担ったそうである。東北六県の六自治体と六つの夏祭り団体と商工会議所、それに電通グループと、官民一体となった取り組みで、構想からわずか三ヶ月ちよつとという短い準備期間で、第一回の「東北六魂祭」が開催され、震災の影響がまだ色濃く残る仙台市に、東北各地や全国から実に三七万人の参加者が訪れたのである。

「東北六魂祭」は、震災の翌年二〇一二年の五月には盛岡市で二四万人、翌二〇一三年の六月には福島市で二五万人の人を集めて開催された。電通グループとしては、東日本大震災で甚大な被害を受け

たこれら三県で開催して終了としたい考えだったが、東北の他の自治体からの強い要請を受けて、「東北六魂祭」はさらに回を重ねることになった。二〇一四年五月には山形市で、二〇一五年五月には秋田市で、二〇一六年六月には青森市でそれぞれ開催され、東北六県を二巡した。翌二〇一七年に、この「東北六魂祭」の後継イベントとして「東北絆まつり」が開催されることが発表された。東北六県の県庁所在地の夏祭りが一堂に会し、六県の県庁所在地の持ち回りで開催されるというスタイルは「東北六魂祭」と同じである。「東北絆まつり」の第一回はこの年の六月に仙台市で開催され、来場者数は四万五千人と、「東北六魂祭」のどの回をも上回る人出となった。東北六県が一体となって共に自慢の祭を披露し合うというスタイルのこのイベントがすっかり定着していることが窺える。翌二〇一八年六月には盛岡市で三〇万三千人、二〇一九年六月には福島市で三〇万八千人を集めた。

「東北六魂祭」から「東北絆まつり」へ

「東北六魂祭」は、震災の翌年二〇一二年の五月には盛岡市で二四万人、翌二〇一三年の六月には福島市で二五万人の人を集めて開催された。電通グループとしては、東日本大震災で甚大な被害を受け

りの山車や楽器や多彩な衣装を展示するイベント「プレミアムアートコレクション」が山形市中心部の施設で開催され、翌二月にはその年の五月に山形市での開催が発表された。

しかし、感染の拡大は収まらず、東日本大震災の発災から一〇年、「東北六魂祭」からも一〇年というこの年、結局この年は六つの祭りのパレード並びにステージイベントの中止を余儀なくされ、規模を大幅に縮小して開催された。翌二〇二二年五月、秋田市で感染対策を行い、陸上競技場の中でパレードを行うという形ながら通常開催の復活にこぎ着けた。さらに二〇二三年六月、新型コロナウイルス感染症が五類に移行した後の開催となった青森市では、ようやく元通り公道でのパレードが復活し、二九万人の人出と、新型コロナウイルス感染症が猛威を振るう前の来場者数を取り戻したのである。

そして迎えた今年の「東北絆まつり」。仙台市で二回目の開催ということは、「東北絆まつり」が二巡目に入ったことを意味する。「東北六魂祭」とは違って、「東北絆まつり」は今後も東北六県で開催していくという宣言でもあつた。そして、来場者数は冒頭でも紹介した通り、過去最高となった。既に東北に欠かせない祭り

として広く定着したことがよく分かる。「東北六魂祭」が無理を承知で初年度七月に開催した思惑は、このイベントをきっかけにその後続く東北六県の夏祭りの誘客につなげたいということにあつた。そして、その趣旨は今の「東北絆まつり」にも受け継がれている。「東北絆まつり」で東北六県の夏祭りを一通り見た人が、今度はそれぞれの夏祭りに出掛けていく。そのような流れをつくることができてきている。関西出身で今は仙台に住む私の友人も、今回青森ねぶたを初めて見て、「一度ぜひ現地を見てみたい」と言っていた。青森での開催時



仙台のケヤキ並木の道を青森ねぶたが練り歩くのは「東北絆まつり」ならではの光景。

を除き、東北絆まつりに参加するねぶたは中型ねぶたで、現地の「青森ねぶた祭」に登場する大型ねぶたより一回り小さい。現地でも大型ねぶたを見れば、さらなる迫力を体感できるはずである。「東北絆まつり」は、来年はお休みで、次の開催は再来年二〇二六年の盛岡市である。来年二〇二五年は、実は「大阪・関西万博」に出席することが決定している。内外の人に、東北の夏祭りの魅力を直接伝えられる機会である。ぜひ関西の地でも、東北の心意気を大いに示してきてほしいものである。

「東北絆まつり」は、来年はお休みで、次の開催は再来年二〇二六年の盛岡市である。来年二〇二五年は、実は「大阪・関西万博」に出席することが決定している。内外の人に、東北の夏祭りの魅力を直接伝えられる機会である。ぜひ関西の地でも、東北の心意気を大いに示してきてほしいものである。



カキツバタ



キシヨウブ



アヤメ



アオサギ



ハナシヨウブ



サクラソウ(白)

今月号は、「芒種」の季節の花々の競い合いというテーマにして、「アヤメ」、「カキツバタ」、「キシヨウブ」、「ハナシヨウブ」、「サクラソウ(白)」、「フデリンドウ」の六つの「花美人たち」を並べてみた。

どの花も、凛とした立ち姿で、しかも華やかで、かわいしい、たしかに「花美人」としか表現のしようがない。とても魅力的な花々だ。

そこに、「アオサギ」を花のひとつに見立てて、並べてみたが、花々に引けを取らない姿だ。

最後は「元気のないタヌキ」だが、花々の美しさを引き立てる役回りだ。

遠野の自然はまことに魅力にあふれている。

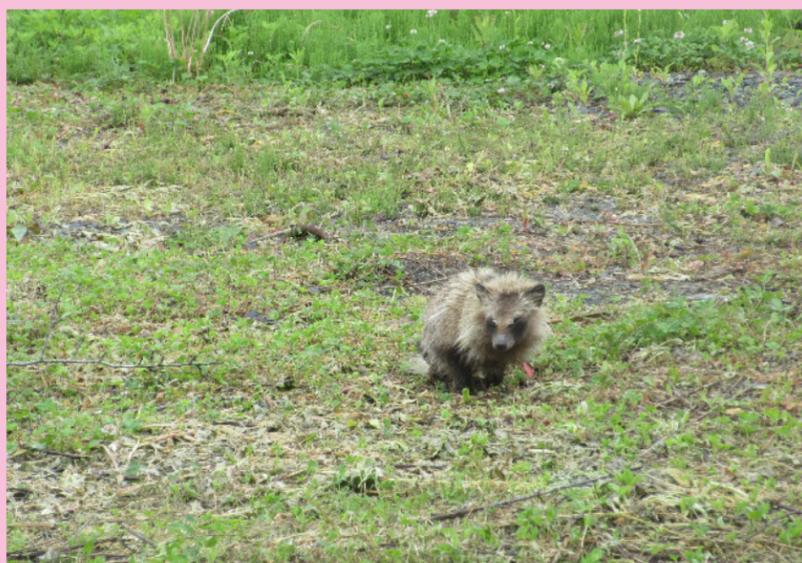
シリーズ 遠野の自然

「遠野の芒種」

遠野 1000 景より



フデリンドウ



元気がないタヌキ

新シリーズ【東北を再発見する旅】…⑨ 青森の縄文遺跡三昧旅 レンタカーを駆使して走りまわった青森県内・縄文の弾丸ツアー



青森県内の縄文遺跡地図
(北海道環境生活部縄文世界遺産推進室作成地図の一部借用)

「青森の縄文遺跡三昧弾丸ツアー」は八年前
北海道・北東北の縄文遺跡群は二〇二一年(令和三年)七月二十七日、世界文化遺産に登録された。
いまから約三年前のことなので知っている人もたくさんいるはずだ。
筆者はそれよりも五年ほど前、いまから八年ほど前になるが、急に思い立ち、三泊四日の北海道・北東北の縄文遺跡の弾丸ツアーの一人旅を実行した。
筆者はそのときはまだ、

北海道・北東北の縄文遺跡の世界文化遺産登録申請のことは知らなかったたので、たまたま行き先が一致しただけである。
この旅の企画の目的は、訪問の縄文遺跡数を一挙に増やそうと思ったためである。なぜ増やそうと思ったかといえば、筆者は、アマチュアの縄文研究家を自認しているが、その割には、訪問した縄文遺跡数が少ないのではないかとずっと気にしていたからだだった。
予定していた訪問遺跡数は十数カ所、かなりの数

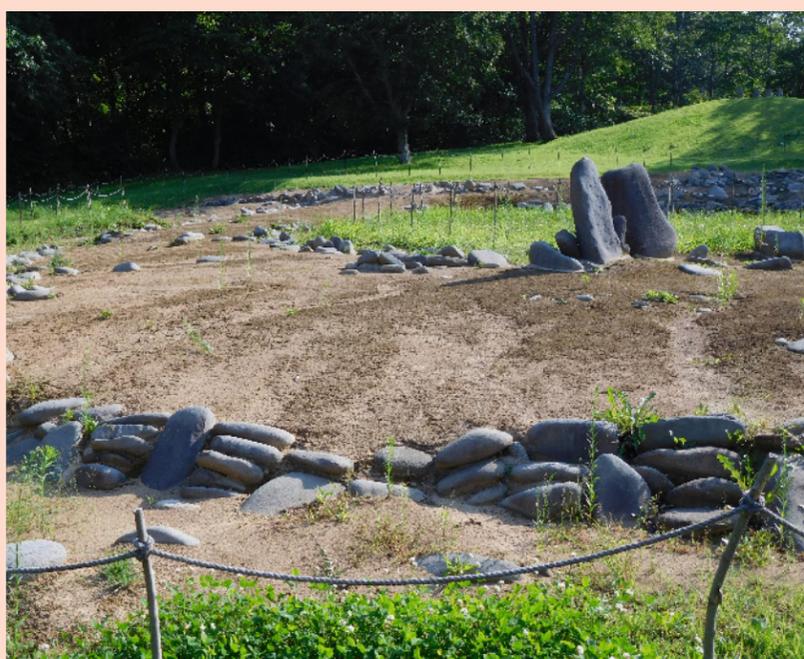
で、東京からの往復移動時間を差し引くと、かなりの強行軍となるが、何とかなるだろうと考えた。
この旅行の最初の訪問地は、岩手で、青森は岩手に続いての訪問地だった。
青森は縄文遺跡の宝庫なのでとても楽しかった
「是川縄文館」
最初に訪ねたのは「是川縄文館」。
ここには、有名な国宝の「合掌土偶」がある。ぜひ見たかった土偶である。
写真撮影には事前許可が



是川縄文観入口



二ツ森貝塚



青森市の小牧野遺跡の環状列石①



青森市の小牧野遺跡の環状列石②

いると言われたので、許可を取らずにしっかりと目に焼き付けた。

「豆埴土偶」というので、何か折っている姿なのかと勘違いされるが、これは「座位分婉」といって出産の様子を描いた土偶であると思う。アマゾンにはこうした出産形式がいまもある。

古代日本でも、一人で座った形で出産したようだが、それはともかく、他にも見るべき縄文遺産がたくさんあって、ここを訪問したのはとても良かった。

「二ツ森貝塚」

この遺跡訪問は当然初めてだったので、レンタカーのカーナビ頼りだったが、かなり狭くて、入り組んだ道を走らねばならなかった。特にこの遺跡はそれほど有名ではないので、案内看板もない。

やっこの思いで到着して、カメラで写真を撮り始めたが、通りかかった地元の人には怪訝な顔をされた。研究者でもなければめったにこない場所なのだろう。

「大平山元遺跡」

やはり、日本最古の縄文土器を見ずに縄文を語るなかれ！である。

喜び勇んでここを目指したが、なかなか見つからない。周辺をうろろろすること小一時間。ついには地元の人に聞く始末。

小学校の分校のような建物に日本最古の縄文土器が

陳列してあったのは少々驚き、またがっかりした。もっときれいな陳列棚に飾られているとばかり思っていたので、拍子抜けした。

縄文遺産はもっと大事にしなければと思った。

「大森勝山遺跡」

津軽半島を南下して、いくつかの小さな縄文遺跡や縄文展示館を見た。

そのなかでは「大森勝山遺跡」がとて印象に残っている。

とはいえ、発掘された場所はずっと埋め戻され、遺物も遺跡もなく、かろうじて、発掘した跡が残っていたので何かの遺跡だとわかる程度だ。

印象に残ったというのは、遠くに岩木山が見えたのだが、往時の縄文人もこの景色を見ていたのだと突然に感じ、急にその場の光景が目に浮かんできたのだ。

往時にここに暮らしていた縄文人と「交感」ができたと感じたことがいまも鮮明に思い出せる。

「木造駅を覆っている巨大な遮光器土偶」

これも有名な、巨大な遮光器土偶を屋根に背負った木造駅だが、すぐ見つかるかと思いきや、なかなかたどり着かなかった。

対面すると、たしかにデカイ。にらみつけられているようだ。

もつと観光客がいるのかと思っただ、見ているのは

筆者一人だけ。独り占めできてよかった。

「小牧野遺跡環状列石」

ここもたどり着くのが大変だった。受付でさらにびっくりした。前日に「熊」が出現したので注意してくれと「熊鈴」を渡された。

縄文遺跡訪問に熊？熊に会いに来たわけではないと内心で笑ってしまった。この環状列石は何かとても神聖なものを感じさせる列石群だった。

明らかに、そこは墓であり、再生を願った場所、みんなが集まって、祈願した場所であることがピンピンと伝わってきた。

「三内丸山遺跡」

「三内丸山遺跡」訪問は二度目だった。強行スケジュールで、青森県内を縦断・横断して、そこについたのは閉館の約一時間前の夕暮れだった。

そのため、訪問者もとても少なく、遺跡を独り占めした感覚になった。一回目の訪問のときは昼間で、たくさんの方がいて騒がしかったが、そのときは、往時の縄文人もこんな感じだったのかと夕暮れ時の遺跡をながめた。

たまたまの偶然だったが、こうした体験も貴重なものだ、写真を見返して思い出す。

ぎゅうぎゅう詰め の青森弾丸縄文の旅

この弾丸ツアーをいま思い出しても、ほんとに「縄文」がぎゅうぎゅう詰めになっていった旅だと思う。

物見遊山の旅とはまったく異なる。目的がある旅。限られた時間で、多くの縄文の遺産に直面できた。何よりも貴重だったのは、往時の縄文人と「数千年の時を超えて、空間を共有」できたことだ。

とても濃密な時間を体験することができた。

人生を変えた旅

そして、この旅で、単なる趣味としての縄文研究から、一歩も二歩も踏み出した。何と表現すべきか、適切な言葉が思いつかないが、表現するとすれば、「縄文人の代理人」となって、現代のこの国に、もつといろいろなことを伝えなければならぬと思ったことだ。

縄文時代は、土器や土偶が有名であるが、縄文はそれだけではない。まだまだ掘り出せていない「縄文文化」がある。それを掘り出して伝えてくれと言われているように感じた。

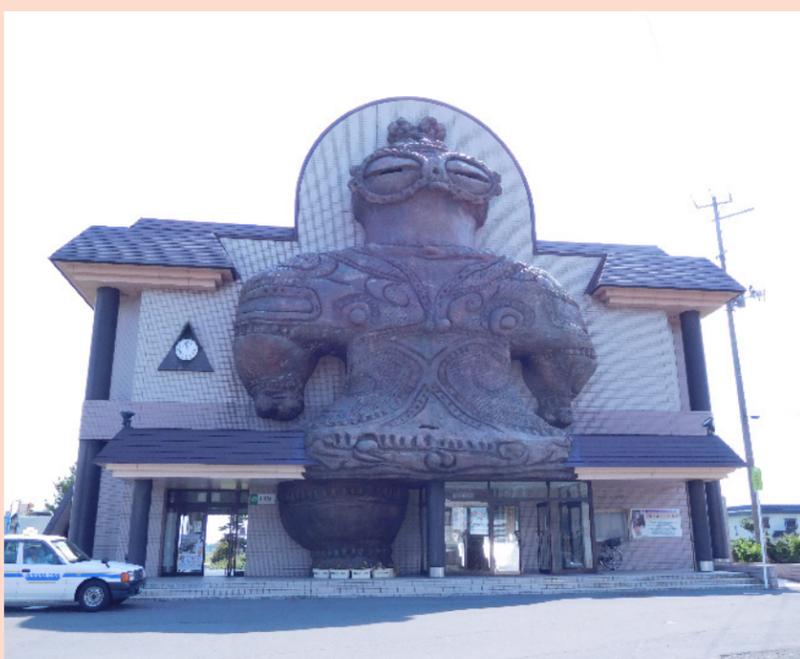
単なる思い込みと言われなくてもいいが、本人はいたって本気である。そうしたことを感じさせる旅だったし、ある意味で、筆者の生き方を変えるきっかけになった旅だった。



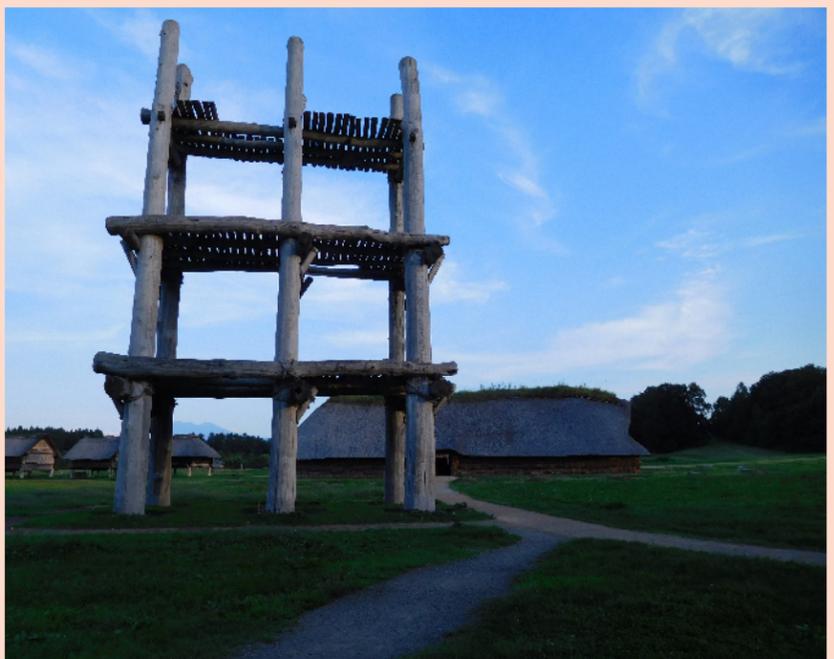
大平山元遺跡出土の日本最古の土器破片(外ヶ浜町)



大平山元遺跡の年表(外ヶ浜町)



つがる市木造駅の遮光器土偶



三内丸山遺跡の夕景



写真で
お伝えする
東北の風景
「ちゃぐちゃぐ
うまこ」
写真撮影
尾崎匠

